

## 受賞者の業績



浜田 範子 51歳（保健婦・青森県）

昭和44年、新郷村に奉職。同51年、下北郡川内町の初代保健婦として活動を始めた。一貫してへき地・開拓地等保健医療に恵まれない地域を抱える過疎町村において、妊産婦および乳幼児の訪問指導、学級の開設、健康相談など保健衛生の向上に取り組んだ。その結果、乳児死亡率0の達成、低体重児出生率の激減など大きな成果を上げ、さらに今後の活躍が期待される。



馬 渕 雅子 48歳（保健婦・岩手県）

昭和41年、葛巻町に奉職。同43年より二戸郡安代町で妊婦健診と母親学級を開催し、妊娠中の生活、栄養、歯科、疾病予防等の指導を実施、妊婦貧血者の減少、妊娠中毒症者の減少に寄与した。また、広大な無医地区の訪問活動のために保健婦活動車の購入に努め、近年は増加する外国人花嫁の妊娠・出産・育児の指導と仲間づくりに努めるなど、幅広い活動に地域住民の信頼も厚い。



水庭 由美子 48歳（助産婦・茨城県）

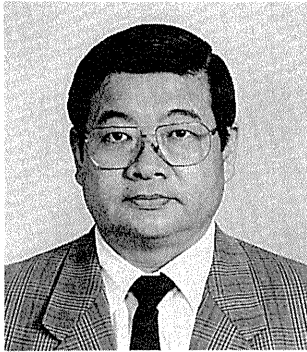
昭和57年より日立保健所の委嘱を受け、訪問指導を開始。特に初産婦の育児不安解消に大きな成果を上げる。同60年から育児不安をもち相談相手のない母親を対象に育児サークルの設立・運営に取り組む。また、「ひたち女性プランをすすめる会」委員として、育児休業の普及・母性保護の施策の充実を提案するなど、出産・育児を女性の一生の中でとらえた活動を展開している。

---



山本 美保子 52歳 (保健婦・埼玉県)

昭和57年より浦和市立病院小児科病棟で患児の入院環境の整備に努める。平成元年から同病院産科病棟で、妊娠・出産・産褥・育児までの一貫した保健指導の体制づくりに尽力。同4年から市民保健センターで母子保健事業計画の立案にかかわり、母親学級・両親学級の内容や日程の見直し、母親の育児不安解消に実績を上げるなど精力的な活動を続けている。



向山 秀樹 51歳 (医師・神奈川県)

昭和57年、横浜市内に小児科医院を開業。地域で「血友病児友の会」「重症心身障害者の会」「地域に住む知的障害者の会」「登校拒否児相談の会」等の結成および運営に尽力した。また、地域の外国人家族が日本に安住できるよう健康管理等の援助に努め、外国人と日本人の交流の場を提供し、子どもの疾病や教育等の意見交換を通して、相互の理解を深めるために多大な貢献をした。



高木 成子 52歳 (医師・新潟県)

昭和48年、中魚沼郡中里村の財団法人上村病院に勤務。以来、一貫して中里村の妊婦健診に従事し、診察、指導にあたる。そのため貧血をはじめ高血圧等の疾病異常が著しく減少し、保健、医療、福祉の連携が密となり、地域の母子保健の向上に大きな成果を上げた。特に実践を通して村の母子保健・福祉事業に対して行う提言は、村の羅針盤的存在として重要な役割を果たしている。



竹村 洋子 50歳 (保健婦・長野県)

昭和45年、東筑摩郡波田町役場に奉職。乳幼児健診における心身障害・疾病の早期発見、母親学級の開設や思春期保健活動等、地域の母子保健の向上のために精力的に取り組む。特に心身障害児のフォローアップ事業では、親の会の育成援助、母子保健連絡会の設立に尽力した。また、乳幼児歯科保健のシステムづくり、子育て支援事業に力を注ぐなど、幅広い活動を展開している。



鈴木春美 48歳 (助産婦・三重県)

5年間の看護婦活動後、地域で新生児の家庭訪問を実施。昭和57年より市立四日市病院で母親学級を開催して、妊婦および褥婦の指導・相談に具体的に実践的な工夫を盛り込み、高い評価を得た。母子保健関連施設を冊子にまとめ、すぐ役立つようネットワークを作成。また、地域での情報交換をして地域全体で母子のサポートをするなど、先駆的な活動に多くの成果を上げている。



上田泰子 49歳 (保健婦・奈良県)

下市町役場勤務後、昭和54年、磯城郡田原本町に奉職。乳児相談体制の整備・充実に取り組み、多大な成果を上げた。また、1歳6か月児健診と同時に健診後のフォロー体制の確立に努め、早期療育体制づくり、幼児教室の開催などに尽力。近年は保健・医療・福祉等の関係者、住民の代表者とのネットワーク会議の開催、母子保健の体系化を推進、地域の母子保健の向上に力を注いでいる。



土江松子 51歳 (保健婦・島根県)

昭和43年、平田市に奉職。出生数が減少する地域の母子保健活動の重要性を痛感して、母子保健連絡会を核に、関係機関とのネットワークづくりを推進し、妊産婦、乳幼児、児童、生徒、大人へと生涯を通しての健康づくりに寄与した。その後、妊産婦から思春期までの母子保健施策を目指し、母子保健計画等の策定にあたり、地域の総合的な子育て支援体制の整備に多大な貢献をした。



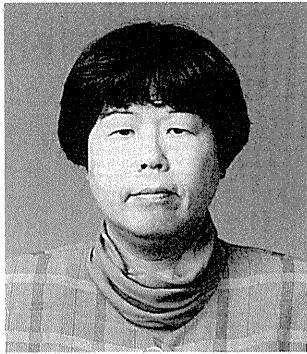
深町幸子 46歳 (保健婦・山口県)

昭和48年、徳山市に奉職。各種健康教育に携わる。きめ細かな母子保健活動を行うため、家庭訪問を中心に活動する母子保健推進員の指導にあたり、母子保健推進協議会の育成に尽力した。母子健康手帳交付時から就学時まで一貫した健康管理を行うためのシステムを開発。さらに母子保健計画を策定し、親子とも健やかに暮らせる町を目指して精力的に活動を展開している。



倉住 玲子 49歳 (助産婦・福岡県)

5年間の病院勤務後、昭和52年より福岡県内の各保健所に奉職。地域に根差した母子保健活動に従事。特に母乳育児の推進のための相談活動、ネットワークづくりに尽力。また、保健所助産婦の業務明確化をマニュアル化して出版し、大きな反響を呼ぶ。さらに母子保健での助産婦のあり方に関する研究を行うなど、全国の助産婦の指針となる先駆的な活動に、高い評価と期待が寄せられている。



高橋 信子 44歳 (保健婦・長崎県)

8年間の病院看護婦を経て、昭和56年、西彼杵郡三和町役場に奉職。訪問事業推進のため、母子保健推進員が増員され、活動が活発になったため、学習会の開催や他町との交流などを積極的に行い、母子保健推進員の育成に多大な貢献をした。また、歯科対策にも精力的に取り組み、保育所・幼稚園の通園児および一般幼児を対象に予防措置の推進に努め、大きな成果を得ている。



浜里 啓子 46歳 (保健婦・沖縄県)

病院勤務後、昭和54年、沖縄県名護保健所に奉職。無医地区の離島、伊是名村に駐在保健婦として赴任。母子保健の重要性に着目し、以来13年間、母親学級、妊婦・乳児相談の開設等、地域母子保健の基盤整備に寄与した。特に昼夜を問わず本島へのヘリコプター搬送に添乗し、母子の救急医療・看護に大いに尽力。また、母子の諸制度活用の体制整備を図るなど多大な成果を上げた。



山本 美智子 49歳 (助産婦・横浜市)

病院看護婦を経て、昭和50年横浜市に奉職。各保健所で地域の妊産婦管理、母性相談、思春期相談等を実施し、特に慢性疾患治療中の妊婦や、多胎、育児不安を訴える母親等、ハイリスク者を中心に家庭訪問を実施して、地域の母子保健サービスの向上に尽力した。また、母親教室の内容を時代にあった新カリキュラムに組み替え、勤労妊婦、経産婦の受講拡大に成果を得た。